

## PICK UP!



## 「ワン・ピッグ」マシュー・ハーバート

電子音楽の奇才が放つ「ワン」三部作の完結編は、1匹の豚が生まれ、調理されて食されるまでを描いたもの。その過程で採取された音でサウンドを構築している。静謐な電子音や無機質なデジタルビートと豚の生活ノイズが渾然一体となりながら、命の儚さが音楽として刻まれていく様は衝撃的。¥2,490〈ホステス〉

「ロスト・アンド・ファウンド」  
グレッチェン・パーラト

NYを拠点に活動する気鋭の女流ジャズ歌手の3作目。ジャズにR&B、そしてサンバからUKポップまで幅広い選曲（+自作曲）を瑞々しく歌い綴り、ジャズの域を超えたりリカルでスピリチュアルな音世界を紡ぎ出す。硬直化した昨今のジャズヴォーカルとは一線を画す深遠な響きが心に染み入る。¥2,800〈ヤマハ〉



「アイム・ウィズ・ユー」  
レッド・ホット・チリ・  
ペッパーズ

¥2,580

〈8月31日発売/ワーナー〉

MUSIC  
NEW RELEASE

## 今月の新譜

Text: Masao Ishikawa

巧みな構図の変化が  
魅せる。新たなバンド像

現代美術の重鎮ダミアン・ハーストが手がけたアルバムカバー。カプセル剤にハエがとまるこの示唆的なアートワークは、カラフルな薬瓶を棚に並べて薬局を再現したインスタレーション「ファーマシー」<sup>1</sup>、生きたハエを牛の頭と殺虫灯とともにガラスケースに入れた「一千年」、というハースト自身のふたつの作品を象徴的に対峙させたかのような印象のものだ。レッド・ホット・チリ・ペッパーズの10枚目となる新作は、そのサウンドにおいてもそんな示唆的な構図<sup>2</sup>を特徴とする作品だといえるかもしれない。

まずは何をにおいても注目なのが、ギタリストの交代である。脱退した不世出の技巧派ジョン・フルシアンテの穴を埋めるのはジョシュ・クリン

グホッフアー<sup>3</sup>。同系統のテクニシャンだが、さらなる器用さをもってバンドに化学反応をもたらしている。フルシアンテが、リズム隊の紡ぎ出すうねりの上で自由奔放に色彩を塗り込めていたのに対し、クリングホッフアーは、あくまでアンサンブルのなかでさまざまな役割を担いながら多彩な音像を描き出すことに徹している。チャド・スミスの叩き出すビートの上で、フリーのベースと時に対峙し、時に調和し、あるいは背後に回り、はたまたアンソニーの歌声を際立たせるべく抑制された背景を共に施したり……。

今までとあえて変わらないフォーマットでありながらも、巧みな構図の変化によってバンドの新たな方向性を示唆する傑作だ。これ見よがしに打ち出すのではなく、じわじわと。新たなバンド像<sup>4</sup>を感じさせる新作である。